

# Doctor's

医師の多様性

# Diversity

医療と教育は人間性。  
人間性は実体験の中からしか  
出てこない

駿台予備学校 古文科講師  
作家・エッセイスト・セミナー講師  
BLK 沖縄・BLK JAPAN (Hawaii office) 代表

鳥光 宏 とりみつ・ひろし

“夢プロデューサー” はじめ、いくつもの肩書きをもち、医学から教育の世界へ飛び込んで約30年。これまで20万人以上の学生を指導、いま最も予約の取れない人気講座を手がける鳥光宏氏。学生時代に感じたこと、医学生や医師に対する思いを古文・日本語指導のプロフェッショナルはどうみているか？

取材・構成◎堀田成敏

## これで決まらなかったら 自分の人生ないぞ

私には、なりたいものがたくさんあったんです。ただ、私の家は裕福ではなく、高校を卒業したら働かないといけない事情がありました。その間、働きながらも「このままだと人生ないな」と思って、貧困の連鎖を何となく感じていたんです。このときにはまだ「貧困の連鎖」なんて言葉は知らなかったんですが、家庭の事情やその思考がそのまま子どもに連鎖して、それで一生が終わってしまうような気がして。じゃあ何をしたらいいんだらうって。就職して

3年目、何かを変えようと思っていたところ、新聞奨学生という制度があることを知りました。そのことを知り合いの新聞販売店の方に話したら、「私のところで働きなさい」と。そこで1年間、早朝から走りまわりました。「これで決まらなかったら自分の人生ないぞ」ってある意味追いつめられたような感じでしたね。そのころ、私は何となく東南アジアあたりで井戸を掘って清浄な水を飲むというところから始めるような、健康指導ができればと考えていました。ちょうどそのときに、琉球大学が国立大学で最後の医学部づくりを

していたんです。そんな縁あって入学したのですが、入学金を支払ったら貯金がほとんどなくなってしまったんです。親の仕送りも一切ないし、どうしたらいいのかと考えていた矢先、友人が「お前、授業料免除の申請出したか？」って聞くんですよ。よくよく話を聞いてみれば、成績さえ良ければ授業料が免除になると。これは天から与えられたものだ！と思いましたね。最終的には琉球大学の医学部を授業料免除で卒業しました。講師をしている予備校の生徒にもよく話すんです。「お金って、つくる

うと思えばつくれるんだよ。結局、勉強することは、実はお金をつくっているようなもの。将来のために勉強することが、将来の給料につながるでしょう。学生時代に勉強して、賢くなったから塾で教えることもできる。勉強したことが、そうやってお金に変わっているんだよ」

### 何かしようと思っても、一人ではできない

やりたいことをやらせてもらうという選択肢が、人生の中にあるってありがたいなって感じています。医学部を出て、どうして古文の道に進んだかよく聞かれるんですけど、先に話したように、僻地に行って井戸を掘るところから考えようと思っていました。ですが「限界がある」ことに気付いたんですよ。自分自身の意思で何かしようと思っても、一人ではなかなかできない。だからといって国の予算で行っても、その中で自分の思うようにはできない。そういうジレンマをだんだん覚えてきて、いろんな人の話を聞いて「このままでいいのかなぁ」と。

医学部時代、私の指導教官が精神科医だったこともあり、仲間の学生たちと、現代社会は心の病が蔓延している、だからこれからはトータルに病気をみよう、体だけじゃなくて、心も一緒にみなきゃいけないんじゃないか？ っていう話をするようになりました。

医療が進歩して、体を治す医療が進

む中で、どうして現代病として心の病が増えるんだろう？ と、非常に不思議な気持ちになり、特に思春期の、学校教育における心の病に関心が深まりました。しかし、そのためには学校現場をみる、しかもちょっとしたのぞくとかじゃなくて、「教員免許を取って学校の先生を実際にやってみないと分からない。生徒と話をしなければ分からない」そう思ったんです。医学部時代には塾講師のアルバイトも経験して、果たして自分自身、医療の方向にいくだけが人生なのだろうか、などとも考えていたのです。心の病のことは誰かがやらなくちゃいけないし、少なくとも私自身そういう現場をみてみたいと思ったんです。

そんな経緯の中で、琉球大学医学部卒業後、法政大学文学部へ。人生ってチャンスがたくさんあるんですよ。それがみえるかどうか。チャンスを見る目を養えたかどうかで、人生が大きく変わるのと思うのです。固定観念じゃいけないし、入試もそんな複眼的な目があればいろんな角度から問題が解けますよね。

### 魔術師は心を読まなきゃいけない

いま、病院では医師が一度も患者さんの顔をみないで「はい、風邪ですね、薬出します」なんてところもありますよね。医療ってももとは人の顔をみて、目が充血しているな、血圧高くないかな。ちょっと目をみせて、などというところから始まりますよね。

古代の医療は、どこの国でも魔術師的な人がしていたはず。魔術師は相手の心を読まなきゃいけないんです。例えば、話をしている相手の腕を組んだ。これは拒絶なんです。そこで、この話面白くないんだな、っ

て気付いてあげないといけない。予備校の講義中、「みんな眠いから部屋がちっちゃくなったね」なんて、わざと話をそらすんです。「人の体って背骨がどうして前に曲がるのかな。実は、一番放熱量が少ないのが球なんだよ。だから人間は寒いと丸まるでしょ。ちゃんと生理学的に、本能として丸まるんだよね。眠くなったら呼吸量が減って体温が下がるから、小さくなる。小さくなるって肺が縮まって呼吸量が減って、脳に酸素がいきにくくなるからもっと眠くなるんだよね。部屋がちっちゃくなっているときはみんな眠いんだよね」。するとみんな笑います。笑うとエンドルフィンなどのホルモンが出て目が覚める。普通、教師なら怒るようなことですが、どうやったら起きるか？ どうしてこうなるのか？ を考え、伝えるわけです。医師に置き換えれば、どうして？ がないようでは患者さんは不幸ですよ。患者さんがどうしてほしいかを考える。もしかしたら現代の医学では無理かもしれないということがあった場合、それでも、無理かどうかは分からない、もしかしたらアメリカで新薬が開発されているかもしれない。そこまで調べることは非常に大変だとは思いますが。それでも、できる限りのことをするべきだと思います。私が学生のころ、医師過剰時代っていわれていたんですよ。そんなこと起きるか？ と疑問でした。そうして医学部の人数を減らした結果、いまでは医師不足です。

### 本当の意味でのグローバル化とは

これからは、東南アジアなどで学んで、頑張っている人が戻ってきてもいいような体制をつくるべきなんです。近年では、グローバル社会とい

いながら言葉ばかりが先行して、英語を話せばグローバル化ということになってますよね。例えば、日本へ観光で訪れた人には、日本語でおもてなしをしてあげることが本当の観光ですよ。もちろん分かりにくいことは英語で補足すればいいし、日本語を教えるのも一つの方法です。そもそも日本語がきちんとできていないのに、英語、英語というのは違うと思います。海外の医師免許は原則日本では使えない、という状況はありますが、例えば、東南アジアで医学を学んだ日本人が、その国の言語をマスターして日本に帰ってきたら、医療に困っている東南アジアの人はそこに行けば話が分かってもらえますよね。そういう制度をつくってもいいわけです。やり方はいっぱいある。どうすれば状況を克服できるのか、そんな思いが私にはあるのです。そういう意味では、これからは医師もトータルで、全人的に人をみていくことや、グローバル化ってなんだろう？ と考えることが必要じゃないかと思います。

### 一歩が出るか出ないかで将来は変わってくる

医師は、プロとして医療のことを学ぶのは当たり前。私の考えですが、医師は健康弱者をみないといけません。実際彼らが、他にどんなことで困っているのかもみてあげるべきです。例えば、長期入院すると、患者さんだけではなく、ご家族にも非常に負担がかかりますよね。そのために家族がどうしているか。お金が足りなかったり、逆に家族が心の問題に直面していたりしないか。しかし、どうしても患者さんしかみることができなくなってしまうというの分かります。では、そういう

状況を解消するために他の国ではどんなシステムを構築しているのか？ という、もっと外枠のことも勉強しないといけませんよね。これは勉強というより実体験でみないといけません。学校の先生も、プロとして専門科目を学ぶのは当たり前。そこから、子どもたちの心は何か？ という心理学的な側面も学ばないといけません。ただし、頭でっかちではだめ。本を読むだけでは何も分からない。実際にどこかへ見に行かないと。それって面倒ですよ。でも、その一歩が出るか出ないかで将来は変わってくるんじゃないでしょうか。その人の幅とでもいうものが変わってゆきますね。それは私自身すごく感じていることです。誰かがこんなことで困っている、こういう問題がある、となったらどこへでも行きますよ。実際見なかったら分からないですから。そういう意味では、医師がプロとして医学の勉強をするのは当たり前なんです。そこを乗り越えた、もっと大きな世界を見に行かないと人間としての幅ができません。やはり最終的には、医療と教育は人間性だと思うんです。その人間性は実体験の中からしか出てこないんですよ。

### いっぱい歩いていろんな人に会って

自分のことを語れない医師なら、患



者さんはきっと納得してくれないでしょう。「こうしなさい」と患者さんに言っても「なんで？」と。そこで「自分も昔ね、こんなことがあってね……」と語れないと、本物じゃないと思うのです。どうすれば経験積めますか？ なんて聞かれますけど、いっぱい歩いていろんな人に会って、話をすればいいだけです。自分から話をすれば、大抵みんな聞こうとしてくれますよ。出会ったら自分から語る。すると、「へー、そうなんですね」と相手も言いやすいですから。そういうことを面倒くさがらずにやっていると、医師が大きな医師になりますよ。いま、全人的に人をみるのが難しい時代だと思います。医療が細分化されて、それはそれで大事なことだと思います。専門のところにはプロがいる、これは非常にありがたい。でも、最初の段階では全体としてどうなっているのかを診ないと。残念ながら、それをだんだん忘れちゃうんですよ。きつと、常にどこかで初歩に戻ることも必要なんじゃないかな。

鳥光 宏（とりみつ・ひろし）  
1959年、東京都生まれ。琉球大学医学部、法政大学文学部卒業。調理師免許ももつ。沖縄でラジオ番組「鳥光宏の熱血塾」のパーソナリティとして活動の経験も。著書に『鳥光宏の楽々古典文法』（文英堂）、『入試にでる古文単語が面白いほど記憶できる本』（上下巻・中経出版）、『古文で身につく、ほんものの日本語』（PHP新書）、『見て覚える 読んで解ける 古文単語330』（文英堂）がある。「いつか東南アジアで医学と教育の殿堂になるような学校づくりができないか、もっと面白い発想ができないか、とあれこれ考え、それをイメージしながらいろんな国を回っているんです」オフィシャルサイト <http://torimitsuhiroshi.com/>

